2022 年度　大谷大学文藝コンテスト

【親鸞部門】総評

審査委員長　井上　尚実

2022 年度の大谷大学文藝コンテスト親鸞部門には、関連学校の生徒さんを中心に多くの中学生・高校生から応募がありました。800 字という比較的短い作文ですが、実際に何を書こうかと自分の頭で考えて文章に表現するのは大変なことだと思います。高校生の部に 2,998 作品、中学生の部に 378 作品も寄せられたのは大変喜ばしいことで、応募してくださったみなさんの創作努力に敬意を表します。９月初旬の締め切りの後に、大谷大学仏教教育センターに所属する教員を中心に、すべての作品を複数で時間をかけて読ませていただき、何段階かに分けて審査を実施しました。

今年度は「あなたが未来に伝えたいこと」というテーマでしたが、未来の自分に向けて今の自分の情況や思いを手紙に綴るような形のものや、夢や希望が実現しているかを未来の自分に問う形のものなど、さまざまな発想と形式の作品がありました。全体的な傾向として、2020 年の春から続く新型コロナウイルス感染拡大（COVID-19）の影響が中学生・高校生の生活に影を落としていることが感じられる作品が多かったように思います。ロシアによるウクライナ軍事侵攻や、安部元首相の銃撃による突然の死など、戦争や暴力の問題も多くの作品に言及されていました。中学生・高校生のみなさんの現実世界に対する認識はリアルで厳しく、全体的に少し悲観的な傾向が強いような印象をもちました。

夏の暑くなる時期に書かれたせいか、地球温暖化とそれに伴う災害の増加が差し迫った問題として多くの作品に触れられていました。ウクライナの戦場の悲惨な状況がニュースでずっと伝えられていることもあり、再び戦争の時代が始まってしまったのではないかという危機感も多くの作品の背景に共有されていました。そのようなグローバルな規模の問題について、「縁起」や「不殺生・非暴力」というような仏教的世界観・人間観にもとづいて解決への道を見据え、それを未来に伝えようとする傾向が見られ、親鸞部門として評価できる作品が沢山ありました。中学や高校の宗教科の授業で学んでいる内容が、そうした作品の中に確かに活きていると感じました。

グローバルな問題以上に作品の中で取りあげられていたのは、身近な家族や友人と

の日常の大切さ、かけがえのなさという感覚です。コロナの影響が続き、社会的・身体的な距離を確保すること（social distancing）が求められる生活の中で、「一緒に居ること」「そばに居ること」「いとおしむこと」の大切さがみんなに見直されているようです。「共に生きる」というのは、国際関係のようなグローバルなところよりも、まず周囲の身近なところから始まることに、多くの若者が気づいて目を向けています。今回の作品の中に表現されたメッセージは、きっとこれからの生き方に反映されていくことでしょう。未来には希望があります。